

石碓 吉村 昭

はりつけ



昭村吉磔



文藝春秋

吉村 昭（よしむら あきら）

昭和2年、東京に生まる。学習院大学中退。
40年「星への旅」で太宰治賞、47年「深海の使者」で文藝春秋読者賞、48年「『戦艦武蔵』『関東大震災』などの一連のドキュメント作品」で菊池寛賞を受賞。

主な著書

「星への旅」筑摩書房
「戦艦武蔵」新潮社
「深海の使者」文藝春秋
「関東大震災」文藝春秋
「冬の鷹」毎日新聞社
「螢」筑摩書房

磔（はりつけ）

昭和五十年三月十五日 第一刷

著 者 吉 村 昭

発 行 者 檜 原 雅 春

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 共同印刷

製本 和田製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

あとがき	動く牙	コロリ	三色旗	磔
229	165	127	65	5

装
幀
司
修

磔

磔

慶長元年十二月十日の朝、下関の家並の間を縫う道を、二十六人の異様な囚人の列が海岸にむかつて歩いてゐた。

道の傍の小さな流れの水面からは水蒸気が湧き、家々の裏手にひろがる畠は、一面に粉をふいたような霜におおわれている。

低い家々の中からは好奇心にみちた顔がのぞき、列のあとをおびただしい大人や子供たちがついてゆく。

かれらは、口々に囚人の群に罵声を浴びせかけ、中には石を投げる者もいた。

警護の者は、その都度石の放たれた方向に眼を向けるが、それは決して囚人への投石をとがめてゐるのではない。警護の者たちは、囚人の傍を歩む自分たちに石が当ることを避けようと

しているだけなのだ。

囚人の姿は、時折眼にする引廻しの罪人よりもはるかに無残なものだった。

後手に縛り上げられたかれらの首から首に縄がかけられ、衣服は襤褸のようにすりきれて、破れ目からは垢のこびりついた皮膚が露出している。むろんかれらは裸足で、やぶれた足指の皮膚から流れ出た血が土とまじり合って、足を大きい土塊のようにみせていた。

さらに、かれらの左耳が一樣にそぎ落されていることも、かれらの容貌を一層陰惨なものにしていた。

それは切り落されて間もないらしく血糊が黒くこびりつき、数人の耳からは血膿がしたたり落ちていた。

しかし、人々の好奇心をそそせたのは、そうした惨めな姿だけではなかった。囚人の群の中には、異様な容貌をした六名の男がまじっていた。毛髪の色、骨ばった鼻梁、腫の色から、それは稀にしか眼にすることのできない異国人にちがいがなかった。

さらに人々の眼は、囚人の中にまじった三人の少年の姿にそがれた。その少年たちは十二、三歳とも思える幼い者たちばかりで、他の日本人の囚人と同じように鬻もとけて毛髪を顔にたらし、血と土でよごれた小さな足をひきずって歩いていった。

列の先頭には、罪状をしるした高札がかかげられていた。

それによると、六名の異国人たちは、ルソンからの使節といつわつて入国し、都に長くどまつて秀吉の禁じている切支丹の布教に従事し、日本人囚人たちは、その布教に協力して同罪となつたのだという。囚人たちの引き立てられてゆく先は長崎で、その地で磔刑に処せられ、もしもその護送をさまたげる者があればその者だけではなく家族とともに容赦なく死罪とする旨が記されていた。

切支丹、磔刑——という言葉に、人々はおびえと蔑み^{さげす}をあらわにして囚人たちに投石と罵声をくり返していた。

やがて潮の匂いが濃くなって、囚人たちは、海岸の船着場に出た。そこには、数艘の小舟が待っていた。

囚人たちは、警護の者に棒でたたかれ、舟にのせられた。かれらは、黙ったまま身を寄せ合つてうずくまつた。

小舟が、漕ぎ出された。

海上をわたる風は冷く、かれらは体温を交し合うように一層体を寄せ合つた。内海から海峡に出ると風は強まり、衣服の破れ目は音を立ててはためいた。

前方に、九州の陸地が小舟の揺れにしたがつて大きく起伏している。囚人たちは、髪を風に吹かれながら陸地の影を見つめていた。

囚人の群は、十一月二十一日堺を発し、大坂を経て瀬戸内海沿いの街道を下関まで追い立てられてきた。出発時の囚人の数は、二十四名であった。

かれらがとらわれたのは、十月下旬であった。

その大量捕縛は京都と大坂で前後しておこなわれ、指揮をしたのは、豊臣秀吉の命を受けた石田三成であった。

秀吉は、天正十年明智光秀によって織田信長が本能寺で殺されたのち天下をとったが、初めの頃は、切支丹に終始好意的な態度をとっていた。そのあらわれとして、天正十四年三月には、イエズス会副管区長コエリユほか神父四人を快く大坂城に引見し、切支丹の全国布教許可もあたたえたりしている。

しかし、秀吉は、切支丹に理解をしめしていたわけでは決してなく、ヨーロッパ文明の流入の仲介をする宣教師たちを利用しようとしていたにすぎない。そして、コエリユ謁見の折にも、コエリユの故国ポルトガルに軍船二隻の発注方を依頼している。

さらに翌年、秀吉は島津征討のため大軍を率いて九州にくだったが、その年の七月再び博多

でコエリュを引見、平戸に來航してきていたポルトガルの砲備船を博多まで回航して見せて欲しいと伝えた。秀吉は、すでに朝鮮征討を意図していて、そのためにも大型の洋式軍船を強く欲していたのだ。

しかし、コエリュは秀吉の依頼を無視して軍船二隻の発注をせず、ポルトガル砲備船の回航にも不熱心で結局実現することなく終った。

秀吉は、コエリュの不誠実な態度に激怒し、それは切支丹そのものへの強い不信感ともなっていた。

秀吉は、九州の地にとどまる間、具に切支丹勢力が予想以上に強大なものとなっていることを知り、その存在に不吉なものを感じはじめていた。

すでに切支丹信者は全国で二十万人以上にもふくれ上り、その過半は、長崎、大村に集中し、さらに九州の大友宗麟、有馬晴信、大村純忠らの大名領主が切支丹に深く帰依していた。そして、それら切支丹大名の領土内では切支丹と対立的立場にあった神社仏閣の破壊が公然とおこなわれ、僧侶は激しい迫害にあえいでいた。

殊に大村領の長崎は、大村純忠が軍資金借入れの担保として教会領に提供され、砦と濠によってポルトガルの基地としての形態を整えていた。

もとに異国の所有に帰し、さらに切支丹信者が日を追うごとに激増しているという事実**に強い不安を感じた。**

しかも切支丹はその性格上必然的に日本古来の武士道と相反し、自殺を禁じるその教義は、武士の美德とされた切腹、殉死を厳禁する結果を招き、秀吉の威令が切支丹大名に通じぬ危惧も充分に予想された。

さらに秀吉を不快がらせたのは、ポルトガル船による日本人奴隷の売買であった。

その頃、ポルトガル船はアジアで積極的に奴隷の売買をおこなっていたが、日本人の婦女子もかなり多く安南、^{アナン}印度方面に売られている事実があり、それを知った秀吉は、ポルトガルに對する反感を一層つのらせた。

たしかに宣教師は、キリスト教をひろめるといふ純粹な熱意を抱いて入国してきていたのだろうが、同時に祖國の植民地政策の意圖を果す尖兵として送りこまれてきたことも疑いない。そして、宣教師は、宗教的な立場と國の利益を背景に、つぎつぎと信者を獲得し、領主をも帰依させていたのだ。

そうした現状を知った秀吉は、副管区長コエリユの態度に切支丹への不信感を強め、博多にいたコエリユに對して、激しい詰問状を突きつけた。

宣教師は、何故強制的に切支丹信者の増加をはかろうとするのか？ 神社仏閣を何故破壊し、

僧侶を迫害するのか？ ポルトガル人は、何故日本人を奴隸として連れ去るのか？

これに対してコエリユは信仰の強制はしていないこと、神社仏閣の破壊は、信者が自発的にやっていることでわれわれの関知することではないこと、日本人奴隸の売買は、われわれも甚だ遺憾とするものである……などと抗弁した。

秀吉は、その回答を不満とし、天正十五年六月十九日、五カ条から成る切支丹宣教師の追放令を出した。

一、日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を授候儀、はなはだ太以不可然候事

という条文にはじまって、大名が切支丹に帰依し、天下の法にもとるような行為をとっていることはなほ遺憾であり、切支丹によって神社仏閣が破壊されていることは前代未聞の不祥事であると説き、日本国に害悪を流す宣教師は二十日以内に帰国すべしと命じている。

しかし、宣教師追放によって異国との貿易に支障をきたすことを避けるため、その第四条では、

「黒船之儀は商売之事に候間、各別之事、年月を経、諸事売買可仕事」

として、貿易はむしろ歓迎すべきこととしている。

この宣教師追放令は、ただちに博多湾の船中であつたコエリユにも伝えられたが、コエリユは船が六カ月間は出港しないので、二十日以内に退去することは到底不可能であると主張した。

その結果、宣教師は平戸へ集結させられたが、多くの宣教師は難をのがれて各地に潜伏した。秀吉は、宣教師追放令と同時に大坂、堺、京都の宣教師館、長崎、茂木、浦上^{うらがみ}の教会領をそれぞれ没収、大村、有馬領の教会も廃棄させた。

秀吉の切支丹禁止政策はそれらの処置によって一段落し、一応の平穩がたもたれていたが、そこに突然起ったのが、イスパニヤ（スペイン）の帆船サンフェリッペ号（総トン数六〇〇トン）の難破事件であった。

サンフェリッペ号は慶長元年六月十七日、フィリピンのマニラを出港、メキシコへ行く途中、大暴風雨に遭遇した。そして、紀伊半島に座礁しかけた後、土佐国浦戸に難破漂着した。

秀吉はその多量の積荷を没収したが、難破事件の取調べにあたった増田右衛門尉長盛の報告は、秀吉の態度を硬化させた。

サンフェリッペ号には武器が積載され、宣教師も乗っていたが、オランダヤという水先案内人が増田長盛にイスパニヤの植民地の広大さを誇り、

「イスパニヤはまず宣教師を送りこんで布教にあたらせ、民心を充分掌握した後、兵を送って領土を手中に入れるのだ」

と、語った。

長盛は、それをそのまま秀吉に報告したが、秀吉は長崎が切支丹大名大村純忠によってポル